

氏名	王 秀梅	
学位の種類	博士(文学)	
学位記番号	第5524号	
学位授与年月日	平成22年3月24日	
学位授与の要件	学位規則第4条第2項	
学位論文名	再読の成立—漢文訓読史の一研究—	
論文審査委員	主査教授 丹羽 哲也	副査教授 村田 正博
	副査教授 齋藤 茂	

論文内容の要旨

再読という訓法をもつ漢字(再読字)の訓読方式には歴史の変遷があり、先行研究は「古訓法」(a 當□□、b 當□□^{ベシ・ム・命影})のうちのaと「呼応の訓法」(當□□^{ベシ・ム・命影})とが併記された結果、再読の訓法(「當^フ□□」)が成立したと捉えている。本論は、「呼応の訓法」の再読字の字種間における成立時期の遅速に注目し、特定の字種に創出された「呼応の訓法」が固定化する過程で新しい附訓形式が生じてできた再読の訓法は、類義字の訓みわけに利用され、更に他字種に広がって成立したことを論証した。考察対象は院政期まで再読の訓法が一般的に見られる「當」「將」「宜」「須」「未」などの五字種で、四章からなる。

第一章「『當』『將』の再読の成立(上)」では、「當」「將」の助動詞訓がそれぞれ「ベシ」「ムトス」に固定化していく理由を訓点資料の内部で跡づけた。当該二字には、共通する用法(「推定」「意志」と、特徴的な用法(「當」は「適當」、「將」は「將然」と)がある。共通用法に対応していた「ム」の訓は、二字の「呼応の訓法」が固定化していく過程で排除され、それぞれの特徴的な用法に対応していた「ベシ」「ムトス」の訓は、「マサニ」と呼応していた諸訓の代表訓となっている。その事実から、「當」「將」の助動詞訓の固定化は、類義字である両者を訓みわけた結果と捉えた。

第二章「『當』『將』の再読の成立(下)」では、「マサニ」は、「當」の「排疑」、「將」の「推測」用法を通して、再読字「當」「將」と対応関係を結びつけたことを論じた。平安初期には漢文を文脈に即して訓読することが一般的であったが、字訓対応の固定化という動きも萌していた。「當」一字がもつ「適當」「意志」用法に対応する「ベシ」「ム」の訓の対立を解決するため、文意を大きく左右しないという副詞の性質を利用して、「マサニ」は「當」の標識訓として用いられ、「呼応の訓法」が創出された。それが後に再読の訓法に変化し、「將」を含む他字種にも援用された。

第三章「『宜』『須』の再読の成立」では、「宜」「須」が「適當」の用法をもちながら、それぞれ特徴的な用法として「適合」「必要」の用法も有することを分析した。「適當」を表す「宜」「須」は共に「ベシ」、「適合」を表す「宜」は「~ニヨロシ」「ベシ」と、「必要」を表す「須」は「モチキル」「ベシ」「スベカラク~ベシ」と訓読されるように、各用法に対する訓法の連続性と示差性が見られる。「宜」「須」の再読は、「適當」の用法をもつ「當」などの字とを訓みわけするため、それぞれの特徴的な用法を訓に示したものと考えた。

第四章「『未』の再読の成立」では、「イマダ~ズ」の語法と「未」との対応関係が上代一般に認識されていたことを論証し、それを踏まえて、「未」が「イマダ~ズ」と訓読される訓法の定着が遅かった原因を追究した。漢文訓読における漢字の訓は漢文の枠組みに制約されるため、「イマダ」は「未」の副詞訓として附訓され得ず、古い訓法では「未」は「ズ」とのみ訓読されていた。再読の附訓形式が創出され、かつ字訓対応の固定化が更に進んだ時期に、「未」の特徴的な用法に対応していた「イマダ~ズ」の訓が「未」字の代表訓として採用され、「未」の再読が成立に至った。

論文審査の結果の要旨

本論文は、漢文訓読史の中で「再読」という訓法がいかにかに成立したのかという問題を、漢文の用法とその訓の対応のあり方を詳細に記述することによって明らかにしようとするものである。具体的には、「當マサニ～ベシ」「將マサニ～ムトス」「宜ヨロシク～ベシ」「須スベカラク～ベシ」「未イマダ～ズ」の五つの再読字を対象とする。

第一章は、「當」「將」の訓の固定化の過程を、類義字の読み分けという観点から解明する。「當」「將」の用法の分析は、中国語学や日本語学の文法研究の成果を援用して妥当なもので、用法ごとの字訓対応の調査は詳細精密である。また、「當」「將」の特徴的な用法の訓が相補的に分布することを示し、共通の用法には共通の訓が対応しているという発見は斬新なものである。従来、漠然と「訓の固定化」と言われていたものが、本論によって、なぜそのように固定化したかという過程が明らかにされた意義は大きいと言える。

第二章は、「當」「將」が「マサニ」という副詞訓を持つようになったのは、「當」の「排疑」用法、「將」の「反語的推測」用法から始まり、それが他の用法に拡大していったと推測する。和語「マサニ」の統一的分析や、「當」「將」の諸用法の中で、「マサニ」に直接対応するのは、「適当」「推定」「意志」「将然」といった用法ではなく、「排疑」「反語的推測」という用法であるという指摘は貴重なものである。

第三章は、「宜」が「ヨロシク～ベシ」と訓読されるようになったのは、「當」「須」などと区別して、その特徴的な用法である「適合」と「ヨロシ」が対応するようになったためであり、また、「須」が「スベカラク～ベシ」と訓読されるようになったのは、「當」「宜」などと区別して、その特徴的な用法である「必要」の表現性を表すためであると述べ、類義字の訓みわけという方法がここでも有効であることを示している。

第四章は、上代文献における「未」字は否定辞本来の「イマダ～ズ」と訓むのが基本であったということを論証し、「未」は「イマダ」とのみ対応するという通説的理解を覆す。また、漢文訓読において「イマダ～ズ」という訓が平安初期には見られず後代になって確立した事情を、漢文の附訓形式の発達に求める。これは、「未」字における上代文献と漢文訓読の訓の齟齬の説明として説得力に富むものである。

以上のように、本論文は、再読という訓法の成立について、従来よりも遙かに具体的に深い問題設定を行い、古代中国語文献と古代日本語文献の両方に渡る詳細綿密な分析を施すことにより、「當」「將」「宜」「須」「未」という字種ごとの訓法の成立の歴史を描き出すことに成功している。漢文訓読史の解明に精密な語法分析を組み込むという、著者が独自に築き上げた方法は、今後の発展が大いに期待される場所である。

以上の所見により、本論文は大阪市立大学博士（文学）の学位を授与するに値するものと認められる。